

三野 新 Arata Mino

1987 年福岡県生まれ。写真家、劇作家、演出家、アーティスト。

2010 年より「写真と身体の関係性を追求するカンパニー」であるヒッピー部を主宰し、以降全作品の写真・構成・演出を手がける。2013 年『Z/G』にて初個展以降、三野個人名義での展示 / パフォーマンス作品を発表。

「恐怖の予感を視覚化する」ことをテーマに作家活動を行っており、見えないものを見る手法として、物語・写真行為・演劇を横断的に試行 / 思考しながら制作している。

主な受賞歴にフェスティバル / トーキョー 12' 公募プログラム選出、第 2 回 & 第 4 回写真「1_WALL」展入賞、TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD #04 準グランプリ & ホンマタカシ審査員賞受賞など。

www.aratamino.com

A artist, photographer and drama director, Arata Mino thinks of photography through theatrical methods to create and present pieces on the theme of visualizing the modern premonition of fear. Since he was a student at Waseda University in 2010, he served as the Artistic Director of the Hippie-b, a company focused on exploring the relationship between photographs and the body. Since then, he has handled photography, planning, and direction for the Hippie-b productions. Starting in 2013, he has presented performances and exhibits under his own name. Participant in the Public Program of Festival/Tokyo 2012. Multiple award recipient for photography in Japan, including being selected to present at 1_WALL exhibition.

EDUCATION:

2011 Graduated from Theatre and Film Arts course, faculty of literature, Waseda University

2013 Graduated with a M.A. in Intermedia Art course, faculty of fine arts, from Tokyo University of Arts

2017 Completed doctoral course in Tokyo University of the Arts, majored in Intermedia art (Doctor of Arts).

Record of Awards and fellowship:

2010 Selected for The 2nd “1_WALL” exhibition

2011 Selected for The 4th “1_WALL” exhibition

2012 Selected for Emerging Artist Program of Festival/Tokyo12

2012 Selected for The 42th Ezoe foundation photography fellowship

2014 TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD # 04 second prize & Takashi Homma's prize

Solo exhibition and performingarts program:

“Z/G” (2013, G/P gallery, Ebisu, Tokyo)

“Prepared for Film” (2014, SNAC, Kiyosumishirakawa, Tokyo)

“Prepared for Film ver. G/P gallery” (2014, G/P gallery, Ebisu, Tokyo)

“Passing pictures action” (2015, G/P + g3 gallery, Shinonome, Tokyo)

OFF KAWARA project vol.1 / “What's OFF KAWARA's action?” (2015, G/P gallery, Ebisu, Tokyo)

“Z/G” ver.stock (2015, stock, Sendai, Miyagi)

“Prepared for FILM re:action” (2016, Minowa oak building, Tokyo)

"Human Fish and the Shore" (2016, G/P gallery shinonome, Tokyo)

Publication:

“Z/G”, art beat publishers, 2014

“Human, fish on the shore” project

『人間と魚が浜』プロジェクト

(2016～)

【プロジェクト概要】

①『人間と魚が浜』のシナリオ（インスタレーション）

②『人間と魚が浜』アートブック（戯曲・写真集）

③『人間と魚が浜』（演劇公演）

1. Scenario of “human, fish on the shore” : installation art work
2. Art book of “human, fish on the shore” : art book work
3. “human, fish on the shore” : Theatrical work

【About Arata Mino's theatrical piece "Human, Fish on the shore."】

This work was created to symbolize modern society. At the same time, it also portrays the process of trying to study and find a way of communicating how humans and fish can live together and coexist. Consisting of a vast amount of white boxes, the set design features the refrigerating styrofoam that serves as caskets for fish and here also serves as a tool of communication connecting humans and fish. Costuming that resembles ghillie suits and life jackets is patterned after modern warfare and the ensuing waves of refugees that migrate across our oceans. Through taking the fiction surrounding humans and fish and using it to depict the specific circumstances of people living in Japan in the modern day, the work attains a distinctly realistic feel. Ultimately, what are we? Humans or fish?

【Story line】

Humans simply enjoys fishing. Fish, on the other hand, are simply terrified of it. The inequalities between humans and fish gradually become clear, and highlighted the underlying violence and discrimination. At the same time, it is also demonstrated that a human and a fish are searching for a way to co-exist but this too fails. However, attempted relationship between the two parties subtly changes and after the humans disappear, fish reflect on existence of humans.

【作品概要】

本作は、現代社会の寓意として描かれた作品です。そして、同時に人間と魚がどうやって共に生きていけるか、というコミュニケーションの方法を探究するプロセスを見せています。膨大な量の白い箱の美術は、魚の棺桶としての保冷用発泡スチロールであり、また人間と魚を繋ぐコミュニケーションの道具として使用します。ギリースーツや、ライフジャケットのようにもみえる衣装は、現代における戦争、それに伴い海を越え移動する難民の人たちに似せています。人間と魚を巡るフィクションは、現代における日本のある特定の人々の状況を描くのに、とてもアクチュアルに表現することが出来るものでした。私たちは、果たして、人間でしょうか、魚でしょうか。

【あらすじ】

登場人物は、釣りの達人と初心者。それと二匹の魚たち。達人はただ釣りを楽しんでいる。一方で、魚たちはただ恐怖している。人間と魚の不平等さや、暴力的で差別的な状況が浮き彫りとなっていく。ある日、魚が空から降ってきて、初心者と出会う。二人は、意志が通じ合えない中、共生の方法を探るため、様々な手段で意思疎通を試みる。だが、それも失敗して、人間達は魚達のいる場所から去っていく。その中で試された二者の関係性は柔らかに変化し、人間達がいなくなったあとも、魚達は人間達のことを考える。

①『人間と魚が浜』のシナリオ (2017)

1. Scenario of “human, fish on the shore” : installation art work

ミクストメディア

(プロジェクター, 発泡スチロール, 段ボール, 写真, 紙, 鉛筆, 蛍光塗料, ブラウン管モニター, 液晶モニター)

本作のタイトルである「シナリオ」とは、ゴダール『「パッション」のためのシナリオ』をレファレンスしています。ゴダール同様、わたしにとっても、シナリオとして再演を目的としているわけではなく、全く異なる制作、生活、批評のための資料としての「シナリオ」という意味で再構成・編集することを意図したものです。



(インсталレーションビュー・東京藝術大学美術館博士展 2016 年 12 月)

(Installation view • photo by Arata Mino)



(Installation view • photo by Arata Mino)
 (インスタレーションビュー・
 東京藝術大学美術館博士展 2016 年 12 月)

②『人間と魚が浜』 アートブック (2016)

Art book of “human, fish on the shore”

はじめに

この作品は、演劇作品です。そして、同時に写真作品でもあります。一回性の側面を持つ作品を出版するには、多くの困難が伴います。このアートブックは、演劇作品のドキュメントでも、記録でもありません。この本自体が、『人間と魚が浜』の平行世界のような作品として機能するように意図しました。

この物語は、人間と魚の共生の方法を探る過程を示しています。あくまで、その過程しかわかりません。現在の社会の代案というか、オルタナティブな物語の世界。現代日本の寓意、と言ってもいいかもしれません。その過程は、そのあと、失敗するだろうけど、失敗した後に残るものは、きっと観客や物語にでてくる登場人物達にも残るだろうという気持ちで作りました。奇跡みたいなことは起こらないけど、この物語で起こっていることは、きっとこれから起こることかもしれないのです。備えましょう。

PREFACE

This work is a dramatic work. And at the same time, this is also a photograph work. It involves much difficulty for me to publish a only once work. This art book isn't a document of a dramatic work. I intended to make this book as an alternative work of it. This story indicates the process I search for a way of symbiosis of fish with man. Thoroughly, the story knows only its process.

It looks like the present alternative Japan. You may say that this is the allegory of the contemporary Japan. Its process would be failed after the end of story. After failing it, its process would remain deep in a memory of an audience and characters through this work. To look like miracle doesn't happen to you. But the story will HAPPEN to you from now on. Be ready for it.

右写真・アートブック表紙
アートブックより抜粋



<ART BOOK INFORMATION>

photographs, texts, drawings : Arata Mino

graphic design : Shun Ishizuka

book making by Erika Kikukawa, Rumiko Kasai



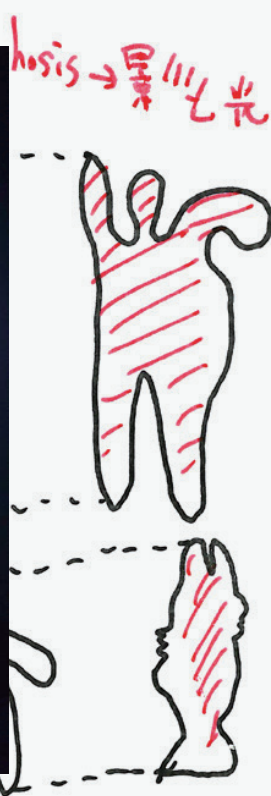
12



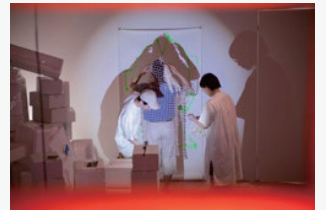
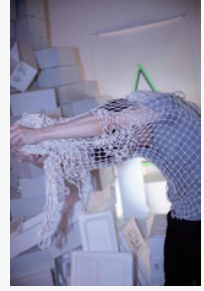
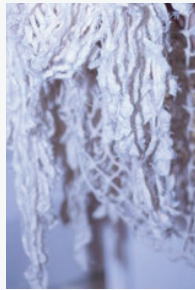
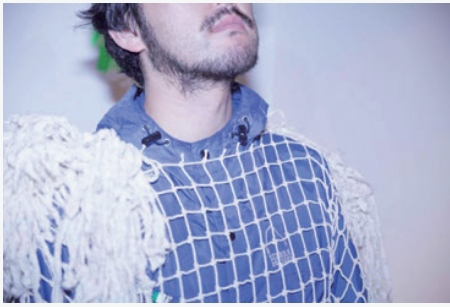
13



30



31



③『人間と魚が浜』

“human, fish on the shore” : Theatrical work

2016 July, at G/P gallery shinonome

< 作品概要 / Information >

『人間と魚が浜』 / Human, fish on the shore

場所 : G/P gallery shinonome

開演日時 : 2016 年 7 月 14 日 (木) 20:00 7 月 15 日 (金) 20:00 7 月 16 日 (土) 14:30 / 18:00

7 月 17 日 (日) 14:30 / 18:00 7 月 18 日 (月・祝) 14:30

出演 (あえいうえお順 : 敬称略) (actor, actress)

大場みなみ 佐藤駿 滝沢朋恵 立川貴一 宮崎晋太郎

Minami Ohba, Shun Satoh, Tomoe Takizawa, Kiichi Tachikawa, Shintaro Miyazaki

作・演出 : 三野新 Play writer, director : Arata Mino

音楽 : 滝沢朋恵 衣装 : PUGMENT Music : Tomoe Takizawa Fashion design : PUGMENT

美術・照明 : 小駒豪 デザイン : 石塚俊 Install and Lighting : Go Ogoma Graphic design : Shun Ishizuka

制作 : 西村梨緒葉、G/P gallery Management : Rioha Nishimura, G/P gallery

Time : 64min.



(以上全て舞台写真・photo by Arata Mino)



(以上全て舞台写真・photo by Arata Mino)



(以上全て舞台写真・photo by Arata Mino)

“Ghost hand”

幽霊の手

モニター, 階段, 映像, time: 3:09

(2017, 山本現代 / Yamamoto gendai)

【作品概要】

山本現代で2017年2月に開催された、上妻世海キュレーション『Malformed Objects - 無数の身体のためのブリコラージュ』に出品された作品。また展覧会期中に、同会場で配布された「指示書」を「戯曲」と見立てた、三野「演出」によるワークショップ作品を発表した。平倉圭を「批評」として招き、鮎屋法水とワークショップ参加者が「出演」する作品。

【ステートメント】

幽霊の正体を見たり枯れ尾花

横井也有のこの俳句で表現されるべきなのは、幽霊が枯れたススキの穂であったことことに安堵するものではない。むしろ、その近似への発見に対する喜びにあるのである。幽霊の手は、人間の手に似ている。しかし、幽霊の手は人間の手ではない。横井の俳句は、それが現実において、幽霊の手が、人間の手に見えてしまうとき、そこに境目を見ることが出来ることを私たちに気づかせる。「境目」とは、人間であることと、幽霊であることの境界のことである。

本作が注目するのはその揺れ動きである。自然さの中に、不自然さが貫入されるとき、その瞬間を私たちは恐怖する。例えば心霊写真を思い描いて欲しい。何気ない日常を写し取った記念写真に、あり得ない方向に曲がる腕や足。或いは、決して人がいない筈の場所に浮かび上がる顔のようなもの。

ただ、本作はその恐怖そのものの内容をテーマとしてはおらず、恐怖を表現するための身体的方法を考える契機にしたい。なぜなら恐怖への志向は、フィクションと現実の境目に存在する身体技法より生まれると私は考えるからだ。(それはワークショップで試行・応用される) その場合、その身体技法は常に現代的な身体表現方法になりうる。なぜなら恐怖を感じさせる技術は、現代的なメディアを通じて更新されている。例えば、『リング』ではビデオ、『回路』ではインターネットと身体との間にもたらされる境目より幽霊は表出し、我々は恐怖する。



上写真 (グループ展インスタレーションビュー・Courtesy of YAMAMOTO GENDAI Photo by Keizo Kioku)



上記2写真 (インスタレーションビュー・Ghost hand Instaration view photo by Arata Mino)



ワークショップ上
演写真 (photo by
Shun Ishizuka)

“Prepared for Film” project (2014-2016)

1. “Prepared for Film” 初演 / premiere

2014 / April

再演 / Replay

2016 / February

【あらすじ】

①街頭、②階段、③部屋の順番で上演され、登場人物は、EとO。Eはカメラで、Oは被写体だ。EがOをカメラで捉え、追いかけることで物語は駆動する。ただし、Oは常にEに撮られている感覚を味わいながら、ただし、はっきりとは気づかない。EはOに追いかけられ、ついに③部屋のシーンで追いつめられてしまう。そこで、EとOは同一人物であることが分かり、お互い見つめ合う二人（一人）は、次第にOの衰弱へと向かっていく。

【解説】

サミュエル・ベケットが書き上げた唯一の映画台本が『Film』である。その『Film』を原案としたこの『Prepared for Film』は、『Film』を制作しようとする架空の映画監督、映像作家のための準備資料として制作された。本作は、『Film』において明かされない、その一見不条理な一方的な眼差しを、片思いの視線として読み替えて作られたものだ。

「好き」だから、「見つめる」という理由で、当初不条理にも見つめる／見つめられるEとOの関係性を新しい解釈で読み替え、カメラと被写体の関係性、つまり、撮る／撮られるという撮影関係を導入する新しい解釈で現代において『Film』を反復した。実存的な意味合いも強い『Film』において、視線の問題のみに三野は焦点を絞り、かつ、今日の社会においてメディアを介して「見る」という行為はどういうことなのかを考察し、制作されたものだ。

<初演概要 / Information>

構成・演出：三野新 play writer, director : Arata Mino

振付・出演：京極 朋彦 dancer : Tomohiko Kyogoku

出演：立川 貴一 菊川 恵里佳 performer : Kiichi Tachikawa, Erika Kikukawa

原案：サミュエル・ベケット 『Film』 Original Story by “Film” Samuel Beckett

ドラマトウルク：山崎 健太 Dramaturg : Kenta Yamazaki

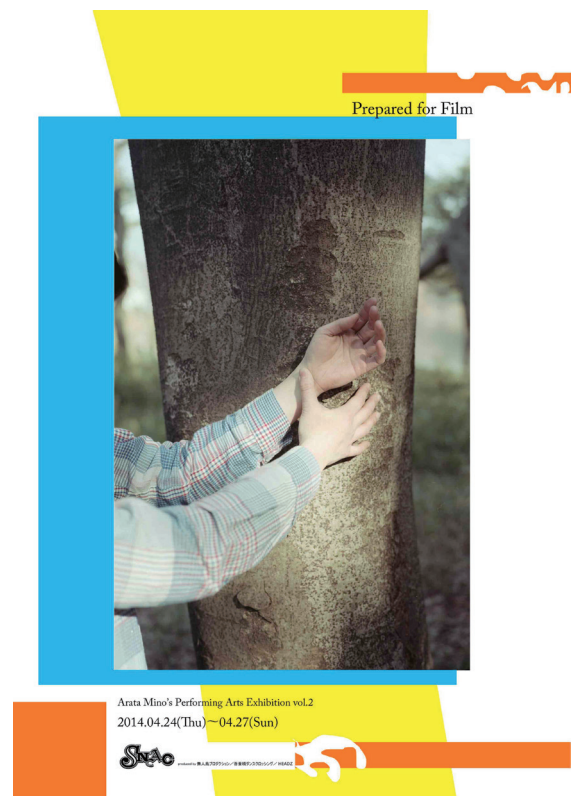
アートディレクター：三嶋 一路 Art Director : Ichiro Mishima

主催：吾妻橋ダンスクロッシング実行委員会、三野新

助成：公益財団法人セゾン文化財団

日時 / date : 2014/4/24(Thu) 19:30~ 4/25(Fri) 19:30~ 4/26(Sat) 15:00~/19:30~ 4/27(Sun) 15:00~

場所 / place : SNAC



上は初演時、下は再演時のチラシ





以上舞台写真 (photo by Arata Mino)

2. “Prepared for Film” Art Book (2015)

photographs, paper text





彼女は目を閉じて (動作L) (眼を閉じる写真のモンタージュ=街頭写真の流用)
床にくずれ落ち、(動作M) (散れ落ちる写真1と眼を閉じる写真のモンタージュ)

ここで、ふと眼を閉じて、床に散らばった花のあいだに顔を埋めて横たわる。(動作N) (散れ落ちる写真2と花の写
真とのモンタージュ)

*She closes her eyes,
then sinks to the ground
and lies with face in scattered flowers.*



and opening case when disturbed by print, pinned to wall before him, of the face of God the
Father, the eyes staring at him.

He sets down case on the floor to his left,
gets up
and inspects print.



カバンをあげかけたとき、前の壁のビンで止めてある《神さま》の顔の写真印刷の写
真が自分を見つめてるのが気になる。カバンを左側の床の上に置き、《開》
立ち上がり、《開》印刷を手帳に眺める。《開》はがした壁紙がらぎれてたれさがっ
ている壁が、しつこく映される。《開》印刷を壁からむしりとり、四つに折り、紙片
を床に投げつけ、足で踏みしめる。《この一連の破壊は、前編と完璧に同期して行わ
れるように。》



He takes up case and is moving towards chair when rug falls from mirror.



顔鏡を始めるA。

カバンを手にとって、椅子のほうに歩きかかると、毛布が鏡から落ちる。

(かなりの間)

この(かなりの間)の時間は、Bが、毛布(の写真)を落とす、とAに言われたことを疑う間である。



・ いままでは、Aの顔鏡内容とリンクした動きをしていたのだが、先にもによって言われた内容が、はたして本当に起こるのか? いや、起こるわけないよね、でも、鏡から言われてたことはその通りになってたし、起こるかも、みたいな疑問を湧かせる。

Bは、毛布(の写真)がある場所におそろおそろ向かい、毛布(の写真)を触ってみる。すると、毛布(の写真)が落ちてしまう。

<statement>

ゾンビは政治的だ。

人がゾンビを必要とする時、その人のゾンビ的な身振りはその人自身の宣言となる。

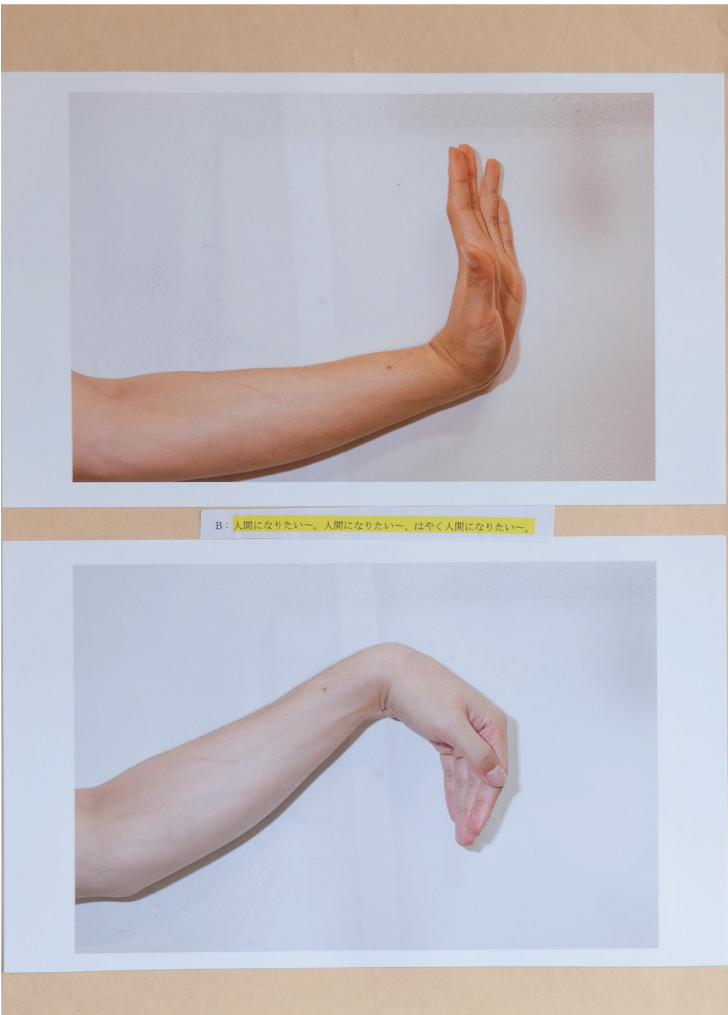
日本において、僕はゾンビ的な身振りは疎外されているように思われた。なぜなら、日本では死後、再び生き返る人々はゾンビとはならないからだ。死後生き返る対象は、幽霊と呼ばれる。

僕は写真と身体を使って、ゾンビと幽霊の物語上の身振りを比較し、作品をつくり発表した。ゾンビは実体し、幽霊は実体しない。両者に共通するのは、死後をテーマに、物語的な想像力によって生み出されたキャラクターである点か。『Z/G』という作品は、震災後の日本における「怖い場所」を写真イメージとして捉えることをまず起点とした。なぜなら、日本における死後の風景と、ゾンビ的な表象を比較するための素地が必要であったからだ。

その後、私はそのイメージから得た着想によって物語を作った。そして、その物語から生み出された身振りの研究を実践したものがこの作品となった。そうすることで、日本の幽霊的な身振りと、輸入されたゾンビ的な身振りとが比較され、日本の写真イメージの中で混じり合う状況を作り出すことができた。



(インスタレーションビュー・
G/P gallery, 恵比寿, 2013 年 8 月・
photo by Arata Mino)



ZとGは記号化された対象
ホーズは記号化された身体

A: 皆さん、これは、ゾンビです。(ゾンビポーズの時の写真が映し出されるタイミングで)
ゾンビと言うのは、この写真のように手を前に出して、目の前の生きて
いる人たちを襲って、食べてしまおうとしています。そして、食べ
られちゃった人もまたゾンビになります。

~~Z~~ ~~G~~

手を伸ばし、手の平をGの方向に向ける。
— 相手を相手、動きを直接止めしめる。
— 食べるための、引きつける暴力。
— 手が口外侵入、
口は大きく開かれ、
防衛心をしない。
全てが外部との接触系を求む。

↑ カットの切り返し

G ~~Z~~

手を伸ばし、手の平をZの方向に向ける。
— 相手を引き入れて、取り込める。
— 同化、憑依、を機械能的に見せるホーズ。
— 身体がないので、物理的に
他者と接触できない。
全て内部へおの、兼取り自分のものにしようとする。

Zombie ⇄ **Ghost**

B: ゾンビが死んでしまったので、幽霊になりました。いま、わたしは幽霊
です。ゾンビには、意識はありませんでしたが、幽霊にはあります。う
らめしやー。



以上は展示作品より抜粋



上記は展覧会フライヤー